

2-1 人はなぜ病気になるのか

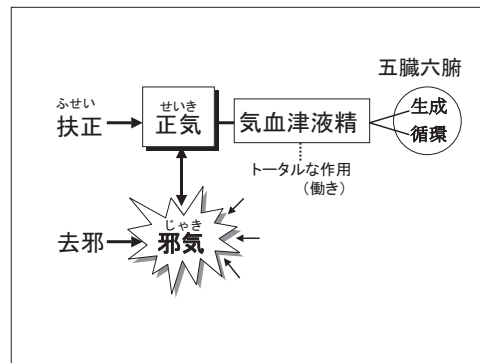
こんどは、人体のなかの統一観はどうなっているのかについて、教科書にもとづいて紹介していきます。

その前にもう1つ考えてみてください。人はなぜ病気になるのでしょうか？人はそれぞれ病気になる力をもっています。あるいは病気になりかけたときに、それに対応する力をもっています。病気になってしまったときに、自分の力で治ろうとする力をもっています。こうした力を、「抵抗力」「 」「ホメオスタシス（恒常性）」と呼んでいますが、東洋医学では「 」とっています。

それに対して、人体に対して悪い影響を及ぼす原因として、細菌やウイルス、あるいは急激な気候の変化といったものがあります。悪い影響を及ぼす邪^{よこしま}な気ということで、「 」

』とっています。ここで考えてみてください。正気がしっかりしていれば、抵抗力も強く、自然治癒能力や回復力も強いので、少々の変動があっても、自分をうまくバランス調整して病気になるようにする自己調節機能が働きます。こうしたすべての人が持っているこの力のことを、東洋医学では総称して「 」とっています。

病気になるかならないかを決定しているのは、この「正気の力」であって、東洋医学の考え方の基本はここに 있습니다。邪気は人体に対して絶えず作用するわけですが、人が病気になるのは、邪気ではなく正気の力によっているのです。正気が負けると病気になり、正気が勝てば病気になりません。



こぼれ話 2-1

[O-157の例]



こぼれ話 2-2

[がん患者さんの例]



こぼれ話 2-3

[代替医療]

2-2 正気の力を決定しているのは？

それでは、人のもっている「正気の力」というのは、何によって決定されているのでしょうか？ それは、これから学習する東洋医学独自の考え方によっているのです。

「正気の力」とは、気・血・津液・精といった4つの体内物質のトータルな作用（働き）として現れます。気・血・津液・精とは何なのか？ これらは体のどこで作られているのか？ こうしたことがわかると、人の力を最大限伸ばすために、調節のポイントをどこに置くべきなのかがわかってきます。ポイントは、気・血・津液・精の [] と [] にあり、それを決定しているのが、いわゆる内臓です。

2-3 五臓六腑と気・血・津液・精

いわゆる五臓六腑の働きによって、正気の正体である気・血・津液・精が生成され、あるいは必要な循環を作っています。そうして体を守って、病気にならないようにしています。逆に何かの原因で気・血・津液・精のいずれかがダメージを受けると、その人は病気になりやすくなるわけです。そのときに東洋医学的に何が不足したのか、何がダメージを受けたのかがわかれば、その不足を補ったり、あるいは生成を促進したりして、元々の正気の力を回復させることができるわけです。

そのためにも、これから勉強していく気・血・津液・精というのはいったい何なのか？ どこで作られるのか？ どういった働きをしているのか？ どういうふうに循環しているのか？ どこに貯蔵されているのか？ こういったことをしっかり把握しておけば、この後、具体的に五臓六腑の生理を見ていきますが、それぞれがどうつながっているのかがわかってきます。